

アムスルだより

No.28 1997年11月11日



Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所

〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

TEL:098-987-2304

FAX:098-987-2875

アムスルとは、阿嘉島臨海研究所のニックネームです



潮に運ばれる種子

-海浜植物-

北風が強くなり、冬の到来を感じさせる季節になりました。この時季は波も荒く、海に入るのは辛くなります。この強い波と風のせいででしょうか、砂浜を歩いていると、潮に運ばれ、海岸に打ち上げられた漂着物をいたるところで見つけることができます。これらが、帯状にたまっているところを、打ち上げ帯と呼びますが、これは、海岸線と平行に、二本も三本もあります。よく見てみると、海藻、流木、海綿の死がい、ブイ、ペットボトルやガラスビン、使い捨てライターなど、いろいろなものが漂着しています。

それら漂着物の中に混じって、植物の種子も見られます。よく探してみると、思いのほかたくさん、いろいろな形のものが見つかります。クシバルで、拾ってみたところ、ヤシの実やアダンの実、大きな梅干しのタネのようなモモタマナ、種名までは分かりませんが様々なマメ科のつる植物の種子など、30分ほどで18種類の種子を拾うことが

できました。ということで、今回はこの漂着した種子についてのお話をしたいと思います。

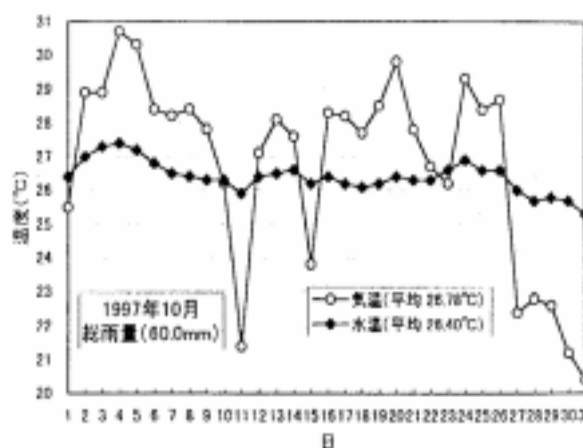
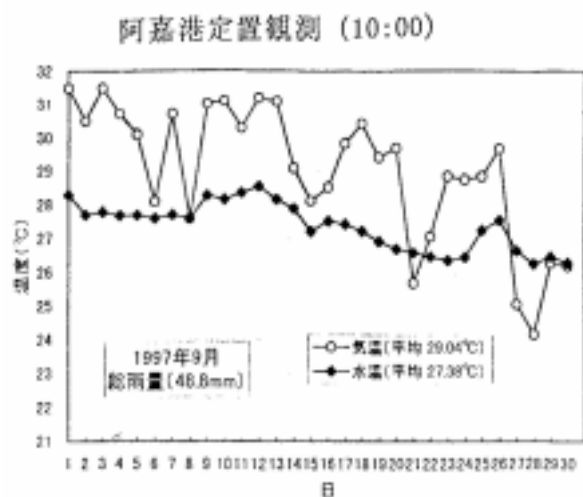
海流によって流され、流れ着いた場所に根を張り、生息場所を広げてゆく植物を“海流散布植物”と呼びます。これらの種子には、海流による長距離運搬に耐えるために、特別なつくりが発達しています。たとえば、ヤシの種子は、厚いコルク質や繊維質に包まれており、これが浮きの役割をします。また、その下には厚く硬い殻が発達していて、種子を海水から守っています。また、マエノハマにたくさんはえているゲンバイヒルガオも、直径7mmほどの小さな種子の表面に、短い毛がびっしりと生えており、これで水をはじくとともに、内側にある空所により、さらに水に浮きやすいように出来ています。これらの種子は、1ヶ月以上の間、生きのまま海水に浮いていることができます。ココヤシなどは、2年以上浮いていることもあるそうです。

海流散布植物は、漂着先の条件がよいとそこで芽を出し、群落を作り始めます。阿嘉島の砂浜でよく見かけるのは、皆さんもよく知っているアダンやモンパノキ、丈が低く紫のかわいらし

い花をつけるハマゴウ、そして先ほどお話ししたグンバイヒルガオなどです。砂浜は、炎天下で太陽によって猛烈に熱せられるだけでなく、強い海風にもさらされる、非常にきびしい環境です。そのためここにすむ植物は、アダンなどのように葉の肉を厚くして水分を蓄えたり、ハマゴウやグンバイヒルガオのように背丈を低くして風の抵抗を少なくするなどの工夫をしています。

こういったきびしい環境下にある砂浜に、これらの植物がはえ始めると、その浜の砂の移動はかなり抑えられるようになります。植物の根が砂をしっかりつかまえ、固定するようになるからです。そして、植物が多くなってくると、落ち葉や実、枝に訪れる鳥の糞などによって、砂中の栄養が増えていきます。もちろん、風や波、雨などによって海へと流されてゆくため、内陸に比べると、その栄養分は多くありませんが、これらの植物がなければ、栄養分は留まることなくただ削り取られていく一方だったかもしれないことを思えば、その果たす役割は大きなものではないでしょうか。

海流によってもたらされた海辺の植物たちは、灼熱の砂浜に木陰をつくり、ときには葉や実などの栄養分を落とし、生活の地盤となる砂浜を守ります。海浜植物たちと、彼らが形作る空間は、その場所を直接の住みかとするオカヤドリなどの動物たちにとってだけでなく、私たちにとっても、豊かな海と陸をつなぎ育む、なくてはならないものであると言えるでしょう。



日本サンゴ礁学会の設立

11月1~3日に日本サンゴ礁学会設立大会が沖縄で開催されました。オーストラリアやアメリカなどには、すでにこうした学会が存在しており、ようやくといった感はあるものの、この設立は歓迎すべきものです。この学会は従来とは異なり、サンゴ礁をテーマに、生物、地質、人文関係などの分野の枠を越えて交流する新しいタイプの学会で、サンゴ礁保全が叫ばれている昨今、その活動が期待されます。阿嘉島臨海研究所も参加していきますが、研究者だけでなく、一般の方の入会も歓迎していますので、興味のある方はアムスルまでお問い合わせ下さい。